日本医史学雑誌　第68巻第4号（2022）　340–349

医史学と私

片桐　一男

青山学院大学名誉教授／（財）東洋文庫研究員

はじめに

日本医史学雑誌 編集部から再度にわたって『医史学と私』の寄稿を依頼された.

私の医史学を述べるとすれば，恩師，板沢武雄先生との出会いに触れないわけにはいかない．洋学史学会の機関紙「通信」に当時の会長青木歳幸氏の依頼で「私と洋学――杉田玄白と心の旅」と題して蕪文を寄稿したことがある.

「医史学と私」の寄稿を依頼された当初，右の事情を編集委員長に伝え，重複してしまうことの可否を，お伺いした．委員長が在外研究で日本を留守にされていた間のことであった由で，お返事に接し得ないまま，再度の寄稿依頼になってしまった次第.「洋学史学会と日本医史学会では学会員の重複は必ずしも多くないと思われますので……」という理由で再度の寄稿依頼を受けてしまった．光栄このうえない．旧蕪文に，加除の手を入れてみたが，かえって，妙なものになってしまうことに気付いた．そこで最少限度の手入れをして，余は医史学にも関連があるかと思える拙い経験を披露させていただくことにした.

あらかじめ事情を述べて，老体に免じてご了承願う次第である.

一　板沢武雄先生との出会いからはじまる

1960年（昭和35年）6月22日，板沢武雄先生が大学院の受講生数名を引率，静嘉堂文庫へご案内．大槻文庫の優品の数々を手に取って説明して下さった．これが26歳の青年が心の眼を見開いて蘭学資料に向き合った蘭学史との出会いである．草創期の蘭学者のほとんどが医師であったから，医史学との出会いといっても良いかもしれない.

釜石の観音寺を持ち，高野山，真言宗の大僧正でもあった板沢先生の講義は，話題の取り上げ方といい，その話し振りといい，まことに魅力に富むものであった．以来，蘭学資料蒐集に引き寄せられてしまった.

長崎はもとより，国内の諸機関から個人，青山学院大学の在外研究の機会に恵まれてオランダに満一年（369日）滞在の間も従事し続けた.

大学院の博士課程にすすんで，研究助手にもなったとき，「杉田玄白」をテーマにした講義をしてあげようといって下さった．たった一人の受講生に対してのことであったから，申し訳ないような，とても嬉しい気持ちであった.

ところが，一講時も受講しないうちに，板沢先生は病床の人となってしまわれた．研究室の助手として事務連絡のために病院の病床に伺う日が続いた．事務的な報告や，ご指示を受けることは二，三分で済んだ．が，そのあと，当時抱えていた越後の蘭方医森田千庵の来翰の解読を指導して下さった．読めない箇所の多い，穴だらけのノートを読み上げ，穴を埋めていただきながら，背景となる蘭学界の諸事を教えていただいた.

がんの痛みに耐えておられた先生であったことは，付き添っておられた奥様よりお聞きして承知していた．恐縮している私に対して，先生は毎回「続きはどうした」と声をかけて下さった．先生にみてもらうために，毎回，前夜は必死に蘭学者の手紙と格闘を続けた．片桐に書翰を解読してやっている間だけは痛みを忘れることができた，と奥様より伺って，恐縮しながらも，必死に取り組んだことを覚えている．このことが，私が蘭学者，蘭方医の書翰解読の力となった．このときのこと

が，その後，どれくらい役立っているか，はかりしれない．

千庵来翰解読を終えたある日，先生が変哲もない，ごく小さなダンボール箱を私に手渡しながらいわれた．「この中に史料が入っているから，人物叢書の『杉田玄白』を書くように」と．「杉田玄白はドクター論文にもなるから」と．

「受講」の立場から「書く立場」に急転換で面喰った．業績のない駆け出しの身を案じて，先生は前助手の安岡昭男氏に同道してもらい，吉川弘文館の吉川圭三社長に会いに行くようにいわれた．

なんとか，吉川圭三社長と日本歴史学会（当時，会長は児玉幸多先生）の承認は得た．しかし，そのあとが大変だった．

「史料が入っているから」という小ダンボール箱は，とても軽いものであった．持ち帰って，おそるおそる開けてみた．板沢先生がラジオ放送された，ラジオ新書の小冊子『杉田玄白と蘭学事始』一冊が入っているだけではないか．茫然自失とはこのことである．四，五日，何も手につかなかった．

ようやく自分自身を納得させたことは次の通りである．

小ダンボールの手渡しは，日本歴史学会と吉川弘文館からの人物叢書『杉田玄白』の執筆を快諾されていた先生が執られた「伝達式」であったのだと．

聞く係から書く係りへ，伝達式を受けてしまった．手許に史料はなにもない．さあ，大変である．

以来，史料集めに奔走．知識を得るために，蘭学資料研究会に加えて日本医史学会，日本科学史学会，地方史研究協議会等に入会し，例会，大会に出掛けて耳学問に努めた．

史料採訪は諸先生の教導によって助けられた．具体例を挙げていったら切りがない．一例だけ披露してみよう．

蘭学資料研究会でお世話になっていた池田哲郎先生にすすめられて，津山の郷土資料館（現津山洋学資料館）に行ってみることになった．初めての津山，郷土館に行ってみると，小林令助に宛てた杉田玄白の書翰が用意されてあった．早速，解読を試み，カメラにも収めた．その時間を見計らったかのように毎日新聞社の記者が社旗をオートバイにはためかせて乗り込んできた．要点を読んで解説，記事になった．このときの書翰が人物叢書『杉田玄白』の口絵を飾っている．

このような世話，段取りは，すべて池田先生の好意によるものと，心に刻んでいる．

数限りない教示，教導によって出来上ったのが人物叢書『杉田玄白』である．恩師に命じられてから十年もたってしまった．おそすぎた答案といったところであるが，霊前に捧げることができた．

吉川弘文館の編集部で気付いて下さったことかと記憶しているが，刊行の年がちょうど「小塚原腑分二百年記念の年」に当たっていた．「はしがき」の末尾に明記して記念の処女作品にすることができた．

処女作品の出版，世間の酷評をうけるのか，無視されるのか，気が気ではない．ところが間もなく「朝日新聞」書評欄に小さいが好評が出た（図1）．翌週には，「毎日新聞」に三倍くらいのスペースで好評が出た（図2）．まずは，ホッと胸をなでおろしたことであった．

人物叢書『杉田玄白』の「はしがき」の最後に「玄白と二回目の心の旅の準備にかかりたいと思っている」と書いたが，その後も関係史料の入手に努めてきた．

2000年の日蘭交流400年を念頭に置いて取り上げたNHKの企画に応えて，1997年4月から9月にかけて半年，毎週土曜日30分間，NHK文化セミナー・歴史に学ぶの一テーマとして「蘭学事始とその時代」をラジオ第二放送で全国放送することができ，テキストとして同書名の『蘭学事始とその時代』を日本放送出版協会から刊行した．放送原稿も別に作ったが，持ち時間通りに放送を続けるため，半年間カゼを引かないように，体調を崩さないように細心の注意を払って臨んだ記憶だけは，たしかに持っている．

2000年，日蘭交流400年の当たり年には，日蘭両国において多彩な催しが続き，オランダ大使館の依嘱で現代版カピタンの江戸参府に関する企画

昭和46年（1971年）3月29日　月　日　新　聞

新刊抄

歴史・伝記

片桐　一男著
杉田　玄白

『解体新書』訳出の苦心談は、これまでもよく書かれてきた。この有名な話を本書でも中心に据え、原書と訳書とをこまかく対照しつつ、着手から完成までの過程をくわしくえがいている。史料に則して、あくまでも厳密な著者の態度は、読む者の心に「蘭学事始」の空気を感じさせるであろう。総じて本書は玄白の生涯を語るについて、その生きた時代、開かれた社会への考察を重んじている。玄白と交わった人たちに関しても、いちいち小伝を付するなど、玄白のすぐれた伝記たるにとどまらず、蘭学史そのものを語る好著である。『人物叢書』の一冊。

（吉川弘文館・八〇〇円）

図1

初の本格的伝記

片桐　一男著　杉田玄白

杉田玄白は「解体新書」を出版し、蘭学の基礎を固めた人物としてよく知られているが、その伝記は少年向きのものが二、三種あるだけだった。本書は近年の科学史にたいする関心の高まりから生まれた、初めての本格的な単独の伝記である。晩年の回顧録「蘭学事始」が一般読者の限界であった彼の伝記は、本書によってよくわしい真実の人間像が明らかにされることになった。

著者は彼の著作だけでなく、その日記や書簡、あるいは交友の言葉など、従来あまり利用されていない資料を広く集め、その足跡を追っている。そして彼の心の動きを、その生きた社会と関連させ、鎖国の中で世界に眼を向けて生き抜いた知識人の姿を鮮明に浮彫りしている。

玄白の仕えた小浜藩は、京都所司代時代の酒井忠用が、山脇東洋に日本最初の解剖観察を許している。漢学の師は荻生徂徠の古学派の系統に属し、そして医学は蘭方医西玄哲に学んでいる。「ターヘル・アナトミア」の翻訳にかけた情熱の素地は、すでに修学時代からうちかれている。「解体新書」の出版に当たって、予想される弾圧を回避するための細心な準備、漢方医たちの批判にたいする反論からは、彼の蘭学普及と医学発展を願う執念がうかがえる。

翻訳の盟主前野良沢が学問に沈潜したのと逆に、玄白は幅の広い交際を好んだ。同志のマネジャー、組織者としてのすぐれた性格をもっている臨床医玄白が偉大な教育者であったことを明らかにしており、同時に彼を中心とする江戸蘭学界を躍動的に描いている。

晩年の玄白は、外国船来航に動揺する世相などを克明に記録し、蘭学の果たすべき使命を考える平面、文芸や書画に多彩な才能を発揮している。著者は、こうして円熟した包容力ありつつ「医事は自然にしかず」という簡筆に集約された彼のみがきあげられた心をたたえている。

（吉川弘文館・八〇〇円）

図2

にも協力することができた．長崎会場の江戸参府カピタン・カーのなかで，オランダ王国の皇太子さん（現国王）に説明申し上げるとともに，刊行したばかりの中公新書『江戸のオランダ人』を献上する好機会も得た．

杉田玄白，『蘭学事始』の関連としては，講談社学術文庫の一冊として全訳注『杉田玄白蘭学事始』を出版することができた．古写本のなかで最も玄白に近い筋のいい長崎浩斎本を底本にして，現代語訳文，原文，注に史跡や参考文献，『蘭学事始附記』も加えるなどして，万全を期したつもりである．

福井県小浜市は，小浜が生んだ偉人として杉田玄白・中川淳庵らを顕彰，2002年に「食のまちづくり条例」を施行，玄白の『養生七不可』等が医食同源の理念に深く関わるものと注目し，食と医療，健康増進等に関する進歩的な研究や取り組みを行っている功績顕著な個人または団体を表彰することを目的として，2002年4月に「杉田玄白賞」を創設した．

翌2003年2月2日，第一回受賞者に対する表彰があり，求められるままに，「杉田玄白―その狙い，決断と行動―」と題して，人間玄白と，社会とともに生きた玄白を紹介，玄白の狙いと行動は現代社会に生かされるべきと講演した．以来，年々，有為の人と団体の表彰が続いている．

同年，小浜市は「御食国（みけつくに）若狭おばま食文化館」を開館した．前述の条例を具現したものといえる．常設展には「玄白先生の養生七不可」「玄白が記録したカステラの製法」などがパネルで紹介されている．

ホテル・サンルート・プラザ東京が「再現江戸時代のオランダ料理」（古文書を解読して再現）長崎出島の催しを再現したオランダ正月を開催するに際して作成してくれた「再現オランダ料理」の大きなカラー・パネルを，協賛の微意を込めて「食文化館」に寄贈することができた．常設展示されていると聞いている．

2003年はまた，3月31日に28年間教壇に立った青山学院大学を定年退職した．これを機に，同年12月26日（私の誕生日）智（とも）書房から，短い作品やエッセーなどが詰まった想い出の作品を出版してもらった．智書房の岩波千恵子社長が『平成蘭学事始』の書名を付けて下さった．

2015年は『蘭学事始』成稿200年に当たった．当たり年である．緒方富雄先生がご存命であったなら，きっと記念の展覧会を開催されたことであろうと思う．

『週刊医学界新聞』（医学書院）の求めに応じて「医学の日の出――杉田玄白『蘭学事始』成稿から200年」の記事を寄稿した．

先のNHK出版の『蘭学事始とその時代』はラジオ放送のほかに，全国書店の店頭に三年間は飾りますから，という出版社の言葉に気をよくして，翌年青山学院大学の教材テキストの一冊に指定したところ，四月に入って本がない，という学生の報告．地方では読書会のテキストに使って下さっていた向きもあると耳にして気をよくしていたのであるが，出版社によれば，早々に売り切れですが，増刷はしません，という返事．書籍扱いの出版ではなく，雑誌扱いの出版であったためのようであった．以来，注や出典，解説を付けて整備したいという希望をもっていた．

そこで，このテキストをもとに講談社学術文庫と一体化して，新たに稿を加えて補充を試みた．そのようにして『知の開拓者　杉田玄白―『蘭学事始』とその時代―』を1月30日付で勉誠出版から出版してもらうことができた．『蘭学事始』成稿200年慶祝の微意を表明できたことを喜んでいる．

続いて2017年は杉田玄白没後200年の当たり年である．洋学史研究会の役員会は大会テーマに「杉田玄白没後200年，その後の蘭学会」と決定した．これに協賛しようと考え付いたのが，年来考えていた『杉田玄白評論集』の刊行であった．

『ターヘル・アナトミア』と対決，会読の頃の玄白は，オランダ語の学習と訳出に打ち込む書斎に坐する学究の徒であった．『解体新書』公刊後は，態度をがらりと変えた．漢方医たちの攻勢に，周りの医師たちの妬（ねた）みに対抗，新学問「蘭学」の堅実な歩みを見守り，家学を維持・発展させていくために，玄白は世間に眼を向け，世界の進運のなかで日本の進路を熟考，決断と行動の人となっていった．置かれた時代の置かれた社会環境にあって，広範囲にわたる評論活動を展開していったのである．

原文と現代語訳を上下二段に紹介した作品は『鶴亀の夢』『玉味噌』『野叟独語』『犬解嘲』『蠏穴談』『耄耋独語』の六作品．このうちの「蠏穴談」は，小浜の生んだ国学者伴信友の旧蔵本で，天下の孤本かと思える．古書で入手できたときは嬉しかった．新公開に踏み切った次第である．評論の内容は社会経済，風俗に対する批判や北方問題に関わるものから自慢話まで様々である．

六作品のなかで，江戸時代のうちから『野叟独

語』が識者の間で最もよく読まれていたことがわかった．いかに北方問題，特に対ロシア問題に危機感を持たれていたか，それが，そのまま現今にまで続いていることが判明した．

玄白の文は，淡々として平明である．しかし，独特の格調を備えていると思う．原文を味読していただけたら幸いである．

玄白は，論を進めるに当たり，随所で古典や諺，格言などを引用し，歴史的事実を引き合いに出し，自己の体験したことも率直に披露して評論を展開している．それらが，効果を発揮し説得的である．なかなかの話術家であると思う．

とりあげた人・物・事件・国などの対象に対する，

・理解の仕方
・交渉の仕方
・対策のたて方

が実にたくみで味がある．

混迷する世界に生きる現代人にとって，玄白の言葉や玄白の手法にヒントを得られる点は少なくないと確信している．

医療技術が格段に進んだ現代にあって，玄白の年齢と単純に比較することはできない．しかし，玄白が『蘭学事始』の草稿を書きあげ，愛弟子の大槻玄沢に，その補訂を托したときをはるかに超えてしまった筆者である．頼まれ仕事は優先しなければならない，と思い努めてきたが，なかなか終えることができない．それでも2016年は，ようやく『江戸時代の通訳官―阿蘭陀通詞の語学と実務―』を出版できた．吉川弘文館を四十八年間も待たせてしまった．申し訳ないことであった．内容が通詞や蘭学者がどのようにしてオランダ語の習得に取り組んでいったか，というものであったから，一人も読んでくれる読者はいるはずもなかろう，と覚悟を決めていたライフ・ワークである．ところが，発刊まもなく「朝日新聞」書評欄に三浦しおんさんが心の籠もった書評をして下さった（図3）．NHKが目を止めてくれた．財団法人東洋文庫を通じて接触があり，2017年9月の一ヶ月，四週にわたって，NHKラジオ第二放送「私の日本語辞典」という番組で「オランダ通詞の語学と仕事」と題して全国放送．NHK放送研修センターのヴェテラン秋山和平アナウンサーの的を射た質問に応じて，日蘭文化交渉史の分野にのめり込んだ研究経緯から初まって，通詞や蘭方医・蘭学者の世界を，気分よく放送することができた．これ

日新聞　2016年(平成28年)3月27日　日曜日　13版　読書欄　16

■江戸時代の通訳官
阿蘭陀通詞の語学と実務
片桐一男〈著〉

以前から不思議だったことがある。ちゃんとした学校も教科書も辞書もない時代において、人々はどうやって外国語を身につけたのだろうか？ただでさえ語学習得のセンスに決定的に欠ける私からすると、それって途方に暮れるほかない状況に思えるのだが。

そんな疑問に答えてくれるのが本書だ。江戸時代、長崎の出島にあるオランダ商館が、海外に開かれたほぼ唯一の「窓」だった。商館のオランダ人とやりとりするには、オランダ語ができなくてはならない。そこで、町人身分である「阿蘭陀通詞（通訳）」が大活躍した。

通詞の家に生まれたら大変だ。「ア・ベ・ブック（ABブック）」でアルファベットの読み書き、オランダ語の初歩を学ぶのにはじまり、単語や日常会話例を覚えたり、作文をしたり、算術を学んだりと、段階的にオランダ語の「稽古」に励む。語学の才がなかったひとは、絶望的な気分だったろうなあ……。

オランダ商館長（カピタン）が江戸で将軍に会うとなると、もちろん通詞も同行する。将軍が馬を所望したら、通詞がオランダ語で細々と特徴を記した注文書（馬の絵入り）を、カピタンに渡す。長崎見物をしたがるカピタンを案内する。遊女の手配もしてあげる。

仕事面だけでなく個人的にも、通詞とカピタンのあいだには心の交流があった。書簡がたくさん残っていて、通詞はカピタンに砂糖などをおねだりしている。なんだかかわいいし、信頼関係を築いていたんだなとわかる。

いつの時代にも、言葉を武器に、未知の世界、新しい世界と触れあおうとする人々はいた。かれらの努力と好奇心が積み重なって、いまがあるのだとつくづく感じた。阿蘭陀通詞の研究を長年つづけ、門外漢でも興味を抱ける本を書いてくれる本書の著者もまた、過去と現在を結ぶ「通詞」だと言えるだろう。

言葉を武器に　未知に触れる努力

評・三浦　しをん　作家

吉川弘文館・3780円／かたぎり・かずお　34年生まれ。青山学院大学名誉教授（文学博士）。『伝播する蘭学』など。

図3

が，杉田玄白や阿蘭陀通詞を追い続けてきた近況である．と思っていたら，吉川弘文館で，ちょうど売り切れるころに，講談社の学術文庫から声がかかり，『阿蘭陀通詞』の書名でその一冊に入ることになり，2021年に刊行をみた．望外の喜びである．

37年間活動を続けてきた洋学史研究会が，残余の資産で最終の記念論文集を刊行して解散することを決定した．

降って湧いたような新型コロナウィルスが地球上に猛威を振るうより以前に，会員の総意によって決まったことである．

記念論文集『洋学史研究別冊　洋学史研究の対外関係と医学・医療』は，2020年6月28日付で，新生社より発刊，会員に配布，若干の余冊を印行したに過ぎない．総目次と例会・大会一覧も附載しておいたので，これによって会の活動と成果の全貌を知ることが出来る．

洋学史研究会の最終例会（2019年11月24日於青山学院大学総研ビル）において，私の主要な蔵書を静嘉堂文庫が引き受けて下さることになった，と，安堵の気持ちから，一寸触れたことがある．これに対し，後日，過分の反応をいただいた．

タイミングよく，間もなく東洋文庫長 斯波義信先生から残りの蔵書の寄贈をしてくれないかという書翰をいただき，このほどその寄贈作業を終えて，いまは解説付き片桐文庫の公刊を待っている．

二　蘭学資料研究会との出会い

新聞広告を見て蘭学資料研究会の例会を傍聴するようになったのがいつのことであったか，記憶にない．受付を手伝ったりして顔馴染も増え，耳学問に努めた．

同会幹事の依頼があったのは1962年の夏頃であったか，と記憶している．

幹事の杉本勲先生とともに，

・例会，大会発表者の決定
・報告書の準備，作成
・全国蘭書の悉皆調査
・会計処理

などの仕事に当たった．

月例研究会では，事前に作成・準備された『蘭学資料研究会研究報告』を受付で出席者が手にして，発表を聴き，メモを書き入れる，という方式がとられた．研究発表後に報告書を作るという多くの研究会・学会とは逆で注目すべき試みであったが，当時まだガリ版印刷の時代であったから，その校正には一苦労であった．

それよりも，幹事の池田哲郎先生から「会員は我儘で，発表するといっていても，すぐ取り止めることが多いから，常に発表できるものを六ツくらい用意しておいて下さい．」といわれたのには閉口した．駆け出しの書生には厳しいことであったが，調査したばかりの蘭書の報告などで頑張った．

受付に持ち寄られる斯界の特殊情報，即売本や品々には勉強になった．殊に一年おきに開催された学術研究大会の開催地は蘭学所縁の地で，関係史跡や資料も伝存していたから，一両日居残りして資料採訪に努めたことだった．

会が共通テーマの一つとしていた旧幕時代輸入蘭書の悉皆調査の一環で沼田次郎先生と金沢大学図書館で蘭書の調査，京都大学図書館長室で山本四郎先生斡旋の華頂女子短大の学生をアルバイトに雇って京都蘭学諸家の蘭書調査に当たったことなど，想い出が多い．『蘭学資料研究』附巻（龍渓書舎）には，解説，総目次，総索引が付いていて，同会活動の全貌を知ることができる．

三　大庄屋川口家の古文書調査

1　反故の調査

千葉市の山王町に山王病院という大きな総合病院がある．我が家は山王病院の開院当初からお世話になっている．院長つね先生の御夫君俊雄先生は谷嶋医院を運営，山王看護専門学校の校長先生でもあり，千葉大学医学部で川口家の長男と同窓でもある．

右のような関係から，川口家の「開かずの蔵」と呼ばれていた蔵を一度見て欲しい，と依頼を受け，春の一日，家内と見学に伺った．

蔵には反故が充満，たまたま取り出してみた反

故を読んでみると，ある夏，初代陸軍軍医総監であった松本順がしばしば海水浴をして，そのたびごとに西瓜を楽しんで食べている様子がみえ，ほほえましかった．

青山学院大学のゼミ生・院生その他で調査を計画，1977年の炎暑の最中，虫干を兼ねて7月23日と24日，蔵の反故を全部広い庭の芝生に持ち出すことから開始．1986年の12月まで，毎月一回の頻度で続けた．10年続けたことになる．

川口家は，その昔，自宅から成田山に参詣するのに，他家の土地を踏むことなく行けたという庄屋中の大庄屋で，幕末の頃には幕府から牧士役も拝命していて，毎年，幕府から貸し出されていたという鉄砲や陣笠なども伝えられてあった．幕末・維新の頃の当主川口新之丞には松本順の長女石（いし）さんが嫁いでいたという歴史のある家．

同家の古文書には，

1　大庄屋関係の文書
2　牧士役関係の文書
3　長崎の医学伝習関係の文書
4　オランダからの医学教官ポンペにはじめて総合的西洋軍事医学を学んだ松本順関係の文書
5　引退後の松本順が力をそそいだ「愛生館」事業，活動を伝える文書
6　川口新之丞の経営した「雷鳴堂」における売薬関係の文書

などが見付かった．

2　その成果

そこで，参加したゼミ生・院生に卒業論文や修士論文の作成史料に適していると思いすすめた．

薩摩芋の生産と販売事業をめぐって仕上げた佐藤隆一君の卒業論文，ポンペの医学伝習や愛生館活動の実態解明に力を入れた沼倉延幸君と八百（旧姓中村）昭子さんの両修士論文が，それぞれ好成績を収めてくれたことは嬉しいことであった．

松本順がオランダ人軍医ポンペから西洋軍事医学の総体を学び，長崎大学医学部のいわば基礎をつくり，江戸に帰って，西洋式の病院蘭畴医院を早稲田に開設，維新後ひそかに視察した山県有朋からの招きで陸軍に入って，日本陸軍における医療制度の確立に尽力，初代の陸軍軍医総監になったこと，ポンペの特訓を受けて，衛生思想の普及に尽し，牛乳と海水浴をすすめたこと，日本人の体力向上に貢献したこと，引退後に力を入れた愛生館事業活動などのことは，日本の医史学上重要視すべき事柄にもかかわらず，すっかり忘れ去られている．

定年後の筆者は，遅蒔きながら，沼倉・八百両君の調査・成果を引き継いで，日本の医史学にとっても重要視すべきことの一つとして，目下，その後の追究を続けている．

四　米沢藩医堀内家文書との出会い

米沢藩医堀内家のご子孫で，東京医科歯科大学麻酔科講師堀内淳一医博が順天堂大学名誉教授で日本学士院会員，日本医史学会理事長であった小川鼎三先生に鑑定を求めて，順天堂大学医史学教室に堀内家伝来の古文書を持ち込まれたのは1969年10月28日のことであった．

小川鼎三先生を中心に，酒井シヅ氏と筆者が文書整理に当たり堀内文書目録の作成に従事した．ついで，小川先生を代表にして，大鳥蘭三郎，堀内淳一，大塚恭男，酒井シヅの各医博に筆者も加わった研究班を構成，文部省の綜合研究「江戸時代後期の蘭方医術の発展に関する研究」で申請がなされ，1971・1972年の二ヶ年度，科学研究費の交付を得て内容の検討に努めた．成果は「特集堀内文書の研究」（『日本医史学雑誌』第18巻第1号，1972年3月）に特集されている．筆者は文書の解読に努め，「堀内文書の研究」(1)～(11)（『日本医史学雑誌』第16巻第4号～第23巻第4号）を印行した．これは堀内文書の約半数であった．この半分を含めて残りの全部を改めて米沢で刊行事業として企画された．成果として後日公刊された『米沢藩医堀内家文書，解題篇，図版篇』がある．

堀内淳一氏は，右の鑑定・研究の成果を得て，同文書の将来を熟慮され，家族会議で協議の末，文書の一式を片桐に渡して解読してもらおうと決せられた由で，相談があった．筆者は即座に辞退

し，文書の内容から米沢市に寄贈されることを進言した．結局1948年8月23日付で米沢市長安部三十郎名義で受納された．

右をうけて，米沢市は米沢市医師会と米沢市上杉博物館の共同事業で企画され，全堀内家文書の解読・注記・解説を筆者に依頼，委託契約書も取り交わされた．現地調査も含めた三ヶ年間従事して，2015年3月27日『米沢藩医堀内家文書　解題篇』の刊行をみた．同書の米沢市医師会髙橋秀昭会長の一文「発刊にあたって」と，「編集後記」が刊行事業の要を伝えている．次いで特別展も開催され，堀内素堂の取り組んだフーフェランドのドイツ語版，オランダ人医師 ヤン・アドリアン・サクセ JAN ADRIAAN SAXE のオランダ語訳本（複写），本邦初の小児科医書である堀内素堂の重訳本『幼々精義』が史上初めて一堂に展示されたことは画期的なことであった．このほかにも注目すべき点が少なくない．詳しくは同特別展の図録解説に譲ることにしたい．

五　美濃蘭学の祖江馬家文書との出会い

大垣市の江馬家に「ミカン箱三ツほどの蘭学資料がありますから，おついでの折に見に来て下さい．」と，蘭学資料研究会と日本医史学会の会員青木一郎先生からの連絡をいただいた．萩で蘭研大会のあった途次，訪れることができた．

江馬家の座敷には，たしかに，「ミカン箱三ツ」ほどの資料はすでに用意されていた．拝見し終えて，これで全部ということはあり得ないと思った．二・三の文書を読み，説明のあと，思ったままの感想を申し上げた．すると，「まだあります」という御当主江馬庄次郎氏のご返事．そこで「お差支なかったら拝見させていただけませんでしょうか」と．「それは屋根裏にあって，ホコリをかぶっていますから，東京からおいでになった先生には，ご覧に入れられません」といわれる．「歴史をやっている者はホコリまみれの紙屑や古書をさわることには馴れておりますから」とお願い，ようやく，それでは，と，裏の部屋へ案内された．階段はなく，梯子を立てかけ「どうぞ」ということになった．

梯子を登って，二階に首を出してみた．そこで視界に入ったものは，のちにわかった『藤渠漫筆』や『近聞雑録』などをはじめとする，おびただしい書物，古文書，軸物などの山であった．

美濃蘭学の祖江馬家である．蘭研関西支部の報告では「江馬家には資料はなにもありません．」ということであった．ただし，屋根裏のおびただしい資料を一瞥したのは筆者の方が一瞬早かった．続いて青木先生からもみてもらった．

やがてできた江馬文書研究会の調査がすすむと，あるは，あるは，『江馬文書目録』に収載されている通りとなった．

翌1972年3月11日，第二回め江馬家訪問のときのことは忘れられない．床の間に「フェイルケの富士図」を掛けておいて下さった．しばらく拝見．軸を縁側まで持ち出して，ガラス戸越しにこれをみると，その料紙には，くっきりと「透し模様」が見えるではないか．オランダ渡りの用紙である．ご主人に軸をガラスに付けて持っていただき，ちょうど技師がレントゲン撮影をするときの要領で，筆者の掛け声で「大きく　いきを吸って，止めて」，オリンパス・ペンSのシャッターを押したのであった．こんな風にして見た人は先生が初めてですと，ご主人も昂奮気味．このときの素人写真がのちに『古美術』誌に掲載されることになった（『古美術』第54号）．

やがて「江馬文書研究会」ができ，本格的調査が始まった．江馬家御夫妻のご理解と内藤くすり資料館（のち博物館）の援助により，関係史跡の見学や史料採訪も行われた．大垣藩医の後裔吉川康雄医博の依頼で吉川宗元の調査にも関係した．1974年8月には日本橋三越で開催の「洋学二百年展」に出展されるなど調査は順調に進み，『江馬文書目録』を1976年に出版，第78回日本医史学会金沢大会で披露することができた．

その後も，折に触れて，江馬家訪問や，文通，電話連絡などが続き，思い出も多いが，冗長に過ぎるので，『江馬文書目録』（江馬文書研究会），『江馬家来翰集』（思文閣出版），『大垣藩蘭方医吉川宗元関係資料　付，吉川家系図・資料目録』（片桐一男編，吉川政子発行）『江馬文書研究会の20年』

（江馬文書研究会）等の図録解説に譲ることにしたい．

六　蘭学江戸家老鷹見泉石資料と古河藩医河口家文書との出会い

医師が中心であった蘭学者・蘭方医の時代にあって，古河藩の江戸家老であり，時の幕政にも深くかかわった武士として，鷹見泉石の名に目を留め，意識したのは修士論文準備中のことであったから，随分，早いことになる．杉田玄白の門に学ぼうとして，結局，大槻玄沢・杉田立卿に学んだ古河藩医　河口家の代々にも眼が向いていった．蘭学資料研究会の有志による鷹見家資料の調査に参加，泉石蒐集の蘭書を調べて「鷹見泉石旧蔵蘭書目録」（『蘭学資料研究会研究報告』163号）を作ったこともあって，日頃，蘭学資料研究会と日本医史学会でお世話になっていた古河市の川島恂二医博の推薦と，小倉利三郎市長の依嘱で，鷹見家資料学術調査団団長をお引き受けすることになったのは1988年6月25日のことである．

団員の人選に当たった．オランダ語，ロシア語，地理・地図，絵画，貿易史，技術史等の比較的若手の専門家を擁する調査団を結成，五ヶ年の歳月をかけて，それまで門外不出の泉石蒐集資料の悉皆調査に当たり『鷹見家歴史資料目録』を公刊した．次いで古河歴史博物館の開館をみ，シンポジウム「鷹見泉石と洋学」を開催，注目を得た．

開館を記念して『古河歴史博物館　展示図録』も出た．のち，筆者は中公叢書の一冊として，初の評伝『鷹見泉石―開国を見通した蘭学家老―』を出版することができた．他に『蘭学家老鷹見泉石の来翰を読む―蘭学篇―』はゲスナー賞を得た．

七　初代陸軍軍医総監 松本順と「愛生館」との出会い

1　秋山愛生館のルーツを探る座談会

いまの公益財団法人秋山記念生命科学振興財団（以降，秋山財団と略称する）のルーツは「秋山愛生館」という薬の卸問屋が発展的に生まれかわった姿である．

「「秋山愛生館」のルーツを探ぐる」という座談会を企画されたのは第三代目の秋山康之進社長であった．1981年の2月に二泊三日のお招きを受けた．

2月3日火曜日，降り立った新千歳の空港は，降りしきる雪の冬空，どんより重かった．晩，ホテル・アルファ・札幌（現，ホテル・オークラ）三階のチェルシーの間，招待者は，松本順の子孫松本銈太氏，康之進社長と懇意の細谷英吉氏，菅孝男氏，医史学で令名の高い宗田一氏，それに筆者，それぞれ夫人同伴で出席，秋山家の親族，会社役員，現財団の秋山孝二理事長の若い姿も見えていた．

初代秋山康之進が札幌進出の頃のこと，その進出をすすめた，初代陸軍軍医総監松本順をめぐることなどに話はおよび，話題は多岐にわたった．終りに，そのときまでに調べて入手していた川口家文書資料のうちから秋山愛生館関係の分を複写して康之進社長に謹呈したことを憶えている．

二日目は，札幌雪祭りに案内され，定山渓温泉に一泊．

三日目は秋山愛生館本社を見学，大きな「鏡」（正しくは鏡の嵌め込まれた衝立）を見分．後日，社内誌『愛輪』の第204号（1981年）に「秋山愛生館の鏡」と題した蕪文を寄稿．

コンコンと降る雪に見舞われて足許ばかりを気にして過した三日間，第一印象は暗いものであった．

2　講演「松本順と「愛生館」」

2010年の秋9月7日，秋晴れの好天に恵まれて，空路，新千歳空港入りをした．札幌ライナーで札幌へ向かう車窓にみる家並み，秋晴れの空気が，なんともオランダの夏に似ていて驚いた．このときの感想を家内が印象深く受け止めてくれたものとみえ「札幌に行ったらどうですか」と嬉しい一言（ひとこと）．これがきっかけで以降札幌避暑が続いた．

翌8日（水）．講演当日も秋晴れに恵まれた．会場はプリンスホテルと道路一つを隔てた国際会議場パミール．演題は「松本順と「愛生館」事業」で，司会は財団元監事の萱場利通氏．

それまで行われた講演はすべて医学もしくは医

療関連のものばかりであった．この年の講演はきっと異質のものと受け取られたにちがいない．いわば秋山財団のルーツにかかわる講演であったからである．幸いにも懇親会パーティでも好評をいただいた．

翌年，講演内容を伝えるブックレット『幕末・維新，いのちを支えた先駆者の軌跡――松本順と「愛生館」事業――』が財団より出版されている．

これがきっかけで，2011年の夏に夏季古文書講座が川口家文書を教材に行われ，

第一年度　“薬屋”の誕生の秘話

第二年度　北の大地の幕末・維新秘話

第三年度　鷹見泉石，松本順，愛生館関係文書．

第三回講座の最終日には，松本順が「発祥致福」と大書した横額を受講者全員に披露をかねて秋山財団に寄贈する贈呈式を行った．この作品は川口中丸さんが筆者に下さった諸資料のうち「まくり」の状態であった一点で，財団で額装にしてもらったものである．

3 「愛生館」文庫

さらに，これらがきっかけで財団25周年記念事業として「長崎医学伝習，愛生館活動資料」の蒐集を依頼され，三ヶ年にわたって青山学院大学図書館を通じて蒐集，松江市の日本赤十字社総務課保管のポンペ関係資料をはじめ，複写資料の蒐集に努めた．いまや，松本順の「ポンペ受講資料，松本順の著訳書，愛生館活動関係資料」が集まり，このコレクションに優るものはない．

これらの資料を旧理事長室に籠って一人で分類，複写資料の全てにペーシ付けをし，以後，誰が，いつ，調査を引き継いでくれても，即座に作業を再開できるようにだけはしておいた．

秋山財団では，松本順，秋山康之進の札幌での活躍について，小展示場をこのほど開設された．併設された「愛生館文庫」とこの展示の充実に期待して今後努めて欲しい私案を記しておきたい．

1　松本順のすすめを受けた初代秋山康之進が札幌に渡った時期の確定，次いで開業し，発展したことの活動を明確にして欲しい．

2　松江赤十字病院に保管されているポンペの長崎医学伝習講義ノートの目録を整理・公開，研究の公開．

3　札幌の秋山愛生館の活動の全内容の解明，公開．

4　愛生館推奨の「三十六方」の内容・研究の公開．（既往の諸資料には処方名だけで内容は知られていない．川口中丸さんから寄贈された，ボロボロの古文書にその内容がみえる．活字にしておく必要を痛感している．）

5　松本順の牛乳・海水浴の功用普及の実態解明と，その公開．

6　松本順，秋山康之進らが，衛生思想の普及に尽した実態解明と，その公開．

7　松本順の著作・訳書の集成・刊行．

などを列挙することができよう．

以上，松本順・秋山康之進の活動，なかんずく愛生館活動の実態解明は日本の医史学発展のために意義あるものと確信する．一層の努力を祈念したい．

おわりに

以上，求めに応じて，拙い経験を披露してきた．

・老体に至り，蔵書の整理，棚卸し，寄贈のための荷造り，送本作業により，すっかり肩・腰を痛め，目下，リハビリ通院に専念している．

・しかし，幸いにも，読み・書きは従前通りである．

・もし医史学調査のうえで，お役に立つことがあるならば，次のようなことだけに特化してお引き受けしたい．

1　蘭方医の未刊書翰等の解読

2　蘭学資料・古文書に散見するカタカナ表記のオランダ語史料の調査・解明

せいぜい，声をかけていただきたく，出かけることは叶わないとしても，なにか方法はあるだろうと思っている．